

競合と対立 —現代ドイツ語の *blühen* とその派生動詞における意味分化—

Konkurrenz und Opposition:

Über die semantische Differenzierung bei *blühen* und dessen verbalen Ableitungen

佐藤 宙洋

東京外国語大学大学院特別研究員

Takahiro SATO

Tokyo University of Foreign Studies, Special Research Fellow

Abstract

Eine der wichtigsten Funktionen der verbalen Präfixe und Partikeln im Deutschen besteht darin, den Sachverhalt, den das Basisverb bezeichnet, aspektuell unterschiedlich zu modifizieren. In den meisten Grammatiken werden *blühen* und dessen verbale Ableitungen als sehr typische Beispiele dafür genannt.

Es ist aber noch zu fragen, was die Unterschiede zwischen *auf-* und *erblühen* (ingressive Verben) und die zwischen *ab-*, *aus-* und *verblühen* (egressive Verben) sind. Solche Konkurrenzsituationen der Verben mit Vorsilben werden in der Forschung eher vernachlässigt, die ein Vorsilbeverb vor allem mit dessen Basisverb vergleicht. Dieses Forschungsdesiderat ist aber bedenklich, zumal die Funktion einer einzelnen Vorsilbe erst dann zu verstehen ist, wenn man sie mit der anderer Vorsilben des stammgleichen Verbs vergleicht und Konkurrenz und Opposition strukturalistisch erfasst.

Die korpusbasierte Untersuchung, die in der vorliegenden Abhandlung angestellt wird, kommt zu folgendem Schluss. Erstens bedeutet *erblühen* tendenziell, dass etwas, was noch nicht da ist, erscheint oder entsteht, während *aufblühen* eher besagt, dass sich etwas, was schon vorhanden ist, entwickelt. Zweitens handelt es sich bei *ab-*, *aus-* und *verblühen* vor allem um Transformativität und Durchgeführttheit. Einerseits drückt nur *verblühen* immer eine Transformation aus, andererseits bedeutet nur *ausblühen* immer, dass ein Prozess zu einem inhärenten Ende führt.

Diese Erkenntnisse lassen sich auf die *glimmen-*, *glüben-* und *klingen-*Gruppe anwenden, die interessanterweise dieselbe Konstellation der Vorsilben haben.



1. はじめに

本稿は、現代ドイツ語の *blühen* およびその派生動詞を対象に、前綴（接頭辞ないし不変化詞）の付与がどのような意味分化をもたらしているのかを解明する。¹

blühen 群は、前綴付与による意味分化の代表的な例の1つである。例えばドイツ語の造語論の代表的な入門書である Erben (2006: 85) でも、前綴動詞における意味分化について論じる際には *blühen* 群が引き合いに出されている。² 当該箇所を引用しておく。

- (1) Sie [Präfixe] bringen Inhaltsmerkmale hinzu, die eine paradigmatische Opposition ermöglichen, d.h. eine distinktive Abhebung des Präfixverbs vom Basisverb (BV) wie von Präfigierungen dieses Basisverbs mit anderen Präfixen; z.B. steht *er-blühen* sowohl in Opposition zu *blühen* wie zu *ver-blühen* [...] Hingegen besteht kein Verhältnis der Opposition, sondern eher der Konkurrenz zwischen *er-blühen* und *auf-blühen* [...] d.h. es gibt nicht nur Präfixe gegensätzlichen, sondern auch solche ähnlichen Inhalts bzw. gleicher grammatischer Funktion. Dabei ist auffällig, daß gerade die formal sehr deutlich unterschiedenen betonten und trennbaren „Verbzusätze“ (z.B. *an-*, *auf-*) funktional den schwachtonigen festen Präfixen teilweise nahezu gleichkommen – auch bei der Verbalisierung von Basisnomina [...], während die Konkurrenz zwischen schwachtonigen Präfixen (*er-blühen*, *°ent-blühen* [...]) oder zwischen betonten Präfixen (*ab-blühen*, *aus-blühen*) weniger häufig auftritt.

(1) で *blühen* 群に関して言われていることをまとめると、次のようになる。すなわち、開始相という点では *erblühen* と *aufblühen*（さらには、有標の使用

¹ 本稿では「派生 (Ableitung)」という用語を、Erben (2006: 80ff.) に倣って広い意味で、つまり接頭辞付与によるものだけでなく、「合成 (Komposition)」として扱われることもある不変化詞付与によるものに対しても用いる。

² ドイツ語文法の基本的な文献でも、*blühen* 群は同様の文脈で頻繁に言及されている。例えば、Duden 4 (2009: 695, 703) では *erblühen*, *verblühen*, *abblühen* に、Admoni (1982: 174) では、*blühen*, *erblühen*, *verblühen* に言及がある。また、ドイツ語で書かれた代表的な言語学辞典でも (Bußmann 2008: 18f.; Lewandowski 1984: 36f.) 動作相の項において、やはり *blühen* 群への言及がある。

域にある(「⁰」entblühen)が競合し、終了相という点ではverblühen, abblühen, ausblühenが競合している。また、開始相のerblühenとaufblühenは、継続相のblühenならびに終了相のverblühen, abblühen, ausblühenと対立している。

本稿は、こうした競合と対立が、より正確にはどのような在り方をしているのか、という問いを提起する。この問いに答えるためには、競合するerblühenとaufblühen、およびverblühen, abblühen, ausblühenの間の意味的な差異をまず解明する必要がある。競合語間の差異が分かれば、対立関係もより精緻に捉えられるはずである。

Stiebels (1996: 10)によれば、「接頭辞と不変化詞の競合」の解明は、「ドイツ語の接頭辞動詞および不変化動詞研究の根本問題」の1つである。また、Erben (2006: 85)も(1)の引用部に続いてこう述べている。「ドイツ語の前綴の体系記述は、こうした在り方を正確に捉え、同種および異種の形態素間の先述した相互作用を完全に記述しなくてはならない」。しかし、ドイツ語前綴の競合と対立の正確な在り方は、本稿が扱うblühen群に関する研究の現状にも示されている通り、実際のところまだ部分的にしか解明されていない。その意味で本稿のような試みには十分な意義があると考ええる。

本論の構成は以下の通りである。第2章では、blühenをはじめとする個々の語に関して、その語義を実現頻度も含めて記述・確認する。それを踏まえ第3章では、競合する複数の語を比較考察する。それによって一方では、aufblühenとerblühenの差異は「発展」か「出現」かの傾向の違いにあるという結論に、また他方のverblühen, abblühen, ausblühenにおいては、特に変化の有無と内在的な咲き終わりに到達するか否かという基準での分化が認められるとの結論に至る。第4章では、当該前綴を競合と対立という観点から考察する。開始相と終了相は非対称的であり、先行研究の指摘するような対立関係は認められないとの結論に至る。第5章では、今後の展望を述べる。

考察は、各種辞書類と造語論の文献を参照しながらコーパス調査を中心に進める。使用するコーパスはDeutsches Referenzkorpusで、検索にはCOSMAS II (IDS, Mannheim)を用いる。³ 検索に際しては、文頭以外に大文字の含まれる語形と、現在分詞形は省く。分析するのは、ある語に関してヒットした例を無作為に上限200例でダウンロードしたデータである(「分析データ」)。200例中から

³ COSMAS II上で選択するコーパスは、W-öffentlich – alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen)。

手作業で無効な例（例えば、klingen の例を検索・収集する場合に混入してくる abklingen の例など）を取り除いたものを「有効データ」と呼ぶ。⁴

2. 個別の考察

本項では、blühen 群の構成語を個別に扱い、語義の実現状況を記述・確認する。対象は具体的には、blühen, abblühen, aufblühen, ausblühen, erblühen, verblühen の6動詞である。

blüh- を語幹とする前綴動詞としては他にも、anblühen という語があり得る。この語に関しては、DWB や Sanders (1968 [1876] : 173) では記載があるものの、他に記載のある辞書類は見当たらない。また、コーパスで anblühen を検索すると（検索日：2019年9月19日；検索式「&anblühen oder (&blühen /+s0 an)」⁵）ヒット数は3482件となるが、200例無作為抽出しても有効データは検出されない（つまり、200例が前置詞の an が共起する例などで占められ、anblühen の例が含まれない）。こうしたことから、anblühen は現代ドイツ語の語彙項目とは言い難い。また、entblühen という語もあり得る。しかしこの語も、例えば Duden (2014: 597) では「18, 19世紀の古典作家の語彙」とされ、コーパスで検索しても（検索日：2019年8月23日）有効データはコーパス全体で2件のみと極めて少数である。⁶ entblühen も、現代ドイツ語の語彙項目とは言い難い。⁷

ある語の語義を記述する際には、どこからを別の語義とするかという多義に関わる問題があるが、本稿では、文法に関与するような差異がある場合（例えば、完了の助動詞選択に関わる、変化の有無）、および原義からの予測が難しい慣用的な意味の場合にだけ多義を認めることにする。

⁴ この方法では、特に頻度の低い語に関して「有効データ」が十分に集まらない場合も出てくる。したがって「有効データ」を200例にすべく、最大件数（COSMAS II だと1万件）を分析するのが理想的である。しかし時間的な制約もあるので今回は全体の見通しを優先し、「分析データ」を200例に揃えた。

⁵ この式によって、blühen の全語形と an が一語として現れる例（anblühend, anzublühen, angeblüht）、もしくは blühen の全語形の後かつ同一文中に an が表れる例の検索が行われる。なお、検索式に関する情報は以下特別な場合を除き省略する。

⁶ 見つかった2例：Einst, o Wunder! **entblüht** auf meinem Grabe (Wikipedia, 2011) ; Zwischen Norma und Michael **entblüht** eine Romanze. (Wikipedia, 2011)

⁷ Mater (1967: 13) に依拠すると、他にも heranblühen, wiederaufblühen, emporblühen, umblühen が候補として挙げられるが、heran-, wiederauf-, empor- のような「副詞的な動詞不変化詞」（Fleischer/Barz 2012: 419）を持つ動詞は、blühen 群という体系の成員と言えるほど確固とした語彙項目とは考えられないため、本稿では取り上げない。umblühen は DWB や Sanders (1924) には記載があるが、本文で言及した anblühen, entblühen と同様に今日もはや一般的とは言えない。

2.1. blühen

検索日：2019年7月12日；ヒット件数：11万3797件
有効データ（無作為抽出した200例中）：160例

blühen（常に haben 支配）には〈(植物や特定の場所などが)花を咲かせている〉ないし〈(花が)咲いている〉という語義が基本的には認められる（〈咲いている〉と略記，以下同様に適宜略す）。また，この語義が比喩的に，つまり実際の花以外に関して「繁栄している」という意味で用いられることもある。境界的な事例に関して数字が変化する可能性もあるが，筆者の判断では前者の例は103件（2），後者の例は42件だった（3）。⁸

- (2) „Ich bemühe mich, dass immer etwas **blüht**“, erklärt die leidenschaftliche Gärtnerin. (Rhein-Zeitung, 11.08.2000)「いつも何かが咲いている [＜blühen] ようにと努めています」と，その熱心な庭師は説明する。⁹
- (3) Korruption **blüht** aber auch auf der zunehmenden Kluft zwischen Arm und Reich. (Mannheimer Morgen, 18.11.2009) 拡大する貧富の差の上には汚職が栄えている [＜blühen]。

blühen には他に，「人」の3格を伴って〈(好ましくないことが誰かに)起こる，生じる〉という慣用的な意味用法がある。当該用例は収集例中に13件含まれていた（4）。¹⁰

- (4) Fast jeden Tag aufs Neue warnen Experten vor den gravierenden Folgen, die uns **blühen**, wenn wir jetzt nicht auf einen ökologisch verträglichen Lebensstil umschwenken. (Spiegel-Online, 04.05.2014)
毎日のように新たに専門家たちは，私たちが今にでも環境に負荷をかけ過

⁸ 大方の辞書は，後者（3）を別語義としているが，本稿では〈咲いている〉という語義のみを立て，（3）のような用例は当該語義の比喩的な用法と捉える。

⁹ 引用に際してはこのように筆者による和訳を付す。なお，当該語の訳は，その語義を意識して行うが，両者は常に完全に一致するわけではない。語義は，文脈から独立した，語に内在する意味だが，訳語はそれが文脈に影響を受けて実現した結果である。

¹⁰ 当該意味用法の成立背景を考えるには，佐藤（1982）の記述が参考になる。佐藤（1982: 233）は，当該 blühen に「(これから)咲く」という語義を認めているが，以前は blühen にも，今日 aufblühen や erblühen によって専ら担われている「咲く」という語義があったと考えれば，それが「生じる」という意味へと拡張されたと解することができる。

ぎない生活様式に移らないならば私たちに起る [＜ blühen] 重大な帰結に警鐘を鳴らしている。

2.2. abblühen

検索日：2019年7月2日；ヒット数：973件
有効データ（無作為抽出した200例中）：30件

上記のヒット数・有効データ数からは、abblühen の出現頻度があまり高いことが分かる。DWDS（最終アクセス：2019年9月13日，<https://www.dwds.de/>）¹¹ の頻度表示でも、7段階中最も低い評価となっている。なお、Duden（2014: 95）のように、abblühen を高尚な（gehoben）表現とする辞書もあるが、収集データから文体的な特殊性を感じ取れなかったこともあり、この点に関しては判断を保留する。

abblühen は、前状態と、それとは異なる後状態からなる変化(Transformation)を表す場合も、変化ではなく終局(Endphase)にあることを表すだけの場合もある。前者の場合は、sein 支配、後者の場合は haben 支配となる（Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997: 1865f.）。今回の調査では、sein 支配の例は17件（5）、haben 支配の例は3件となった（6）。

変化動詞としての abblühen には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせるのを止める〉ないし 〈(花が) 咲き止む〉という語義が想定できる。他方で終局表示の abblühen には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせるのを止めるところである〉ないし 〈(花が) 咲き止むところである〉という語義が想定できる。

- (5) Schon beim Kauf sollte man aber darauf achten, dass die eigentlichen Blüten, die sich im Zentrum der Hochblätter befinden, noch nicht **abgeblüht** sind. (Vorarlberger Nachrichten, 16.12.1999) 買う時点で、花被の中心にあるメインとなる花が咲き止んで [＜ abblühen] いないことにしっかり注意した方がよい。
- (6) Der Kirschbaum hat **abgeblüht**, im Biotop haben die Kaulquappen Beinchen angesetzt [...] (Muschg, Adolf: Sutters Glück, 2003[2001]) 桜の木は花を咲かせるのを止めるところであつたし [＜ abblühen], ビオトープではオタマジャクシが足を生やした。

¹¹ 同 URL は以下繰り返しさない。

また, abblühen が比喩的に, つまり実際の花以外に関して用いられることもある (7)。有効データ30件のうち, 当該事例は3例確認された。

- (7) Keller beschreibt die Zeit als weisses Pergament, auf das wir alle mit unserem Blut schreiben, bis uns der Strom vertreibt. Uns bleibt gerade noch die Frist, unseren Liebesbrief aufs Blatt zu setzen: in Bewunderung der Schönheit der Welt. Wir blühen auf und **blühen ab**. (NZZ am Sonntag, 19.04.2015) ケラーは時間を白い羊皮紙として描いている。私たちはみな, 流れによって追いやられるまで, その上に自分の血で文字を書く。私たちには, 世界の美しさを讃嘆しながら恋文をしたためるだけの猶予がちょうど残っている。私たちは花開きそして咲き止む [**< abblühen**]。

2.3. aufblühen

検索日: 2019年7月12日; ヒット数: 3万5254件
有効データ (無作為抽出した200例中): 155例

aufblühen (常に sein 支配) に対しては, 〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ始める〉ないし 〈(花が) 咲き始める〉という語義が認められる (8)。

- (8) Auf der Wiese entfalten sich die ersten Gänseblümchen, in den geschützten, warmen Weinlagen **blühen** die ersten Mandeln **auf**. (Rhein-Zeitung, 13.03.2012) 原っぱでは最初のヒナギクが花開き, 守られた暖かいブドウ畑では最初のアーモンドが咲き始める [**< aufblühen**]。

有効データ155例中140例においては, 当該語義の比喩的な拡張用法が確認された (9)。aufblühen は比喩的に用いられる頻度が非常に高いと言える。

- (9) Und wie oft hat man dem schwermütigen Hanseaten Johannes Brahms das Etikett „urdeutsch“ angeklebt. Aber war das nicht der, der in Wien **aufblühte** und immerhin fast zwei Dutzend „Ungarische Tänze“ ersann? (Nürnberger Nachrichten, 28.11.2015) ハンザ都市出身のこの沈鬱なヨハネス・ブラームスに, 「ドイツ本来の」というレッテルがなんと頻繁に貼られたことか。しかし, 彼こそ, ウィーンで咲き始め [才能を開花させ; **<**

aufblühen]「ハンガリー舞曲」をとにかく20曲くらい考えついた人物ではなかったか。

2.4. ausblühen

検索日：2019年7月12日；ヒット数：2996件
有効データ（無作為抽出した200例中）：12例

上記のヒット数・有効データ数から、ausblühenは今日稀な表現と言える。DWDS（最終アクセス：2019年7月13日）の頻度表示でも7段階中最も低く評価されている。

Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1865f.) に依拠すれば、ausblühen も abblühen と同様に、sein 支配で変化 (Transformation) を表す場合も (10), haben 支配で終局 (Endphase) を表す場合もあることになる (11)。前者の用法には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ終わる〉ないし 〈(花が) 咲き終わる〉という語義を、後者の用法には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ終わるところである〉ないし 〈(花が) 咲き終わるところである〉という語義が想定できる。

- (10) Die Lorraine-Begonie strahlt jetzt mit rosafarbenen Blüten. [...] Ist die Exotin im Februar **ausgeblüht**, ist sie jedoch ein Fall für den Kompost. (Nordkurier, 07.01.2012) フユベコニアは今ピンクの花を咲かせている。この異国の植物が2月に咲き終わって [< ausblühen] しまっても、たい肥作りに役立つ。
- (11) Das schöne Wetter lässt Allergiker in Berlin und Brandenburg besonders stark leiden. [...] Die einzig gute Nachricht: Die Erle hat in diesem Frühjahr **ausgeblüht**. (Berliner Morgenpost, 04.04.2014) この好天がベルリンおよびブランデンブルクのアレルギー患者たちをことのほか苦しめている。(中略) 唯一のよい知らせは、ハンノキがこの春は咲き終わるところである [< ausblühen] ことだ。

詳しくは次の第3章で論じるが、ausblühen のこの〈咲き終わる (zu Ende blühen)〉という語義は、先に abblühen に認めた〈咲き止む (aufhören zu blühen)〉という語義とは必ずしも一致しない。〈咲き終わる〉においてのみ、その花に内在する咲き終わりに至ることが含意される。

ところで ausblühen に対して〈満開になる〉という語義を想定している辞書もあるが(国松他編1998: 226; Sanders 1924: 57), 本稿は, 当該の意味はあくまでも〈咲き終わる〉という語義の1つの現れと考える。例えば, (11)でも「ハンノキが満開だった」とも訳せるが, だからといって〈満開になる〉という語義を別立する必要はないと考える。なぜなら, 〈咲き終わる〉ことは満開になっていたことを含意するからである。また, 国松他編(1998: 226)の記述する, haben 支配だと〈咲き終わる〉という語義, sein 支配だと〈満開になる〉という語義といった, 語義区分の文法的根拠も実例では確認できない。さらに, Duden (2014), DWDS (最終アクセス2019年7月13日), Wahrig (2011), DWB, 相良(1978)のように〈満開になる〉という語義を記述していない辞書も多い。

なお, 収集例には当該語義の ausblühen が, 比喩的に, つまり植物や花以外の主語に対して用いられている例も2件見られた(12)。

- (12) [...] Bushs innenpolitische Zores verhindern vorläufig, daß die „neue Weltordnung“ zur gefährlichen Drohung **ausblüht**. (Salzburger Nachrichten, 13.06.1992) 内政に関するブッシュの混乱は, 「新世界秩序」が脅威にまで咲き終わる [< ausblühen] のを一時的には防ぐことになる。

ausblühen には第3に, 〈白華する／している〉ないし 〈風解する／している〉という化学に関する語義が認められる。そうした例は4件確認された(13)。¹²

- (13) Kundig führt er durch die Katakomben, an deren Wänden Schimmel wuchert und Salpeter **ausblüht**. (FOCUS, 07.05.2007) 精通した仕方では彼はカタコンベの中を案内する。壁にはカビが繁茂し, 硝石が白華している [< ausblühen]。

¹² なお, 収集例中には, ausblühen が再帰用法と思われるかたちで実現している例も見られた: Zum Glück war das Unheil vorübergehend und jetzt schon wieder fast vergessen. Bis der Raps anfang zu blühen und nach einem schönen ausgiebigen Frühlingslauf... Na ja, hat sich ja bald **ausgeblüht**, der Raps. Mal sehen, was dann umherfliegt. (Nordkurier, 23.05.2015) こうした用法は, 各種の辞書類でも記述されておらず特殊である可能性が高い(Sanders (1924: 57) や相良(1978: 137) では, ausblühen の他動詞用法も言及されているが, その際認められているのは「(植物を)花を咲かせて弱らす」という語義)。

2.5. erblühen

検索日：2019年7月12日；ヒット数：1万741件
有効データ（無作為抽出した200例中）：164例

erblühen（常に sein 支配）は、しばしば高尚な語ないし雅語とされるが（Duden 2014: 612; 国松他編1998: 684など）、頻度や出典に鑑みる限り、例えば一般的な語とされる先述の aufblühen と異なる使用域にあるとは思えない。実際、両語が同一文中に共起する例も見つかる（14）。よって本稿では erblühen の使用域に関する判断を保留したい。

- (14) Mitten im Raum **erblüht** mannshoch Löwenzahn, fünf grüne Stengel samt Blättern, die gelben Blüten **aufgeblüht** oder noch als Knospe. (Salzburger Nachrichten, 18.11.1998) 中央では人の背丈もあるタンポポが咲き始める [＜erblühen]。葉っぱ付きの緑の茎が5本あり、黄色い花々は開花している [＜aufblühen] か、まだつぼみである。

erblühen にも、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ始める〉ないし 〈(花が) 咲き始める〉という語義が認められる（15）。

- (15) Der Efeu ist auch bei Tieren beliebt. Denn er **erblüht** spät im Herbst und trägt im Frühling reife Früchte. (Mannheimer Morgen, 26.11.2016) ツタは動物たちにも好かれている。というのも、秋遅くに咲き始め [＜erblühen]、春に実が熟すからである。

判断の難しい例もあったが、収集例164例中105例においては、当該語義の比喩的な拡張用法が確認された（16）。

- (16) Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **erblühen** liess, hat seit der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts einen stetigen Niedergang erlebt, ohne dass es seine nostalgisch verklärte Beliebtheit eingebüsst hätte. (NZZ am Sonntag, 13.09.2009) かつてアメリカを動かし、新しい街々を沿線に咲かせ始めた [＜erblühen] 鉄道という交通手段は、20世紀前半以来常に衰勢であるが、懐古趣味的に美化されており人気を失っているわけではない。

2.6. verblühen

検索日：2019年7月12日；ヒット数：4011件
有効データ（無作為抽出した200例中）：103例

verblühen（常に sein 支配）には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせるのを止める〉ないし 〈(花が) 咲き止む〉という語義が認められる (17)。また、有効データ103例の中には、この語義が比喩的に用いられている例が11件確認された (18)。

- (17) Rosen dagegen empfiehlt die junge Frau nicht. „Sie **verblühen** zu schnell.“ (Mannheimer Morgen, 24.08.2011) バラは、それに対しこの若い女性は勧めていない。「バラはあまりに早く咲き止みます [< verblühen]」
- (18) Die drei erwachsenen Töchter sind, obwohl knapp über 20, nach ihrer Hochzeit **verblüht**, weil einsam, schlaflos oder nymphomanisch. (Spiegel-Online, 28.08.2000) この3人の成人した娘たちは、20を過ぎたばかりだというのに、結婚後は咲き止んでしまっている [< verblühen]。孤独、不眠、ないし色情亢進ゆえに。

verblühen の語義記述に際し「しほむ・しおれる」という表現を添える辞書も多いが（国松他編1998: 2496; Duden 2014: 2139）、詳しくは3.2で述べるように、「しほむ・しおれる」というのは、〈咲き止む〉という語義の1つの現れであると考えられる。

ところで、Duden (2014: 2139) や国松他編 (1998: 2496) のように、verblühen に他にも〈密かに逃げる、ずらかる〉という語義を記述している辞書もあるが、今回の有効データ例には、この語義の実現と解される例は見られなかった。特殊な使用域の語と考えられるので本稿では以下この語義を考慮しない。

2.7. 中間まとめ

各語における語義の実現状況をまとめると、次のようになる。

	blühen	ab.	auf.	aus.	er.	ver.
〈咲いている〉	✓	-	-	-	-	-
〈～に起こる〉	✓	-	-	-	-	-
〈咲き始める〉	-	-	✓	-	✓	-
〈咲き止む〉	-	✓	-	-	-	✓
〈咲き止むところである〉	-	✓	-	-	-	-
〈咲き終わる〉	-	-	-	✓	-	-
〈咲き終わるところである〉	-	-	-	✓	-	-
〈白華する〉	-	-	-	✓	-	-

表1. blüh- 群における語義の実現状況

3. 比較による考察

3.1. 〈咲き始める〉

表1に示したように、*aufblühen* と *erblühen* は〈咲き始める〉という語義において競合している。では、両語はどのように使い分けられているのだろうか。

両語の意味的な差異に関しては、既に複数の文献で論じられている。その中で Storch (1978: 141) や Stiebels (1996: 74f.) は、項の種別に関する選択制限の違いを指摘している。Stiebels (1996: 74f.) によれば、(19b) において不変化詞 *auf* は、花が開くという空間的な (*lokal*) 意味合いを加えることに貢献しているという。

(19) a. Die Rose *erblüht/blüht auf*. (Stiebels 1996: 74)

b. Die Knospe ?*erblüht/blüht auf*. (*ibid.*)

この指摘はしかし *Die Knospe blüht auf* が容認されることの説明にはなり得るが、それだけでは *Die Knospe erblüht* の容認性が低いことの説明にはならないように思われる。*Die Knospe erblüht* の容認性が低いとしたら、それは一体

¹³ もちろん、この選択制限の存在自体も問題になり得る。*erblühen* の有効データ164例には、*Die Knospen* (pl.) を主語として伴い、かつ創造的な用法とは思えない例も含まれていた。Jetzt *erblühen* die Knospen in voller Pracht. (Hamburger Morgenpost, 03.03.2017) [今やつはみが満開に咲く (< *erblühen*)] 先行研究でも Goergen (1994: 78) において、Eine Knospe (sg.) *erblüht*. という文が通常の例として挙げられている。しかし、選択制限かどうかはさて置き、(19b) の容認性が低いことは、あるインフォーマントも認めており、かなり確からしいと言える。

なぜか。¹³

1つの説明は、er-は空間的ではなく、したがって空間的な意味も持ちうる auf-と比べ抽象的である、という線で与えられる。開花という出来事を具体的に見れば、つぼみが徐々に開き、開ききった状態になるという展開が典型的と考えられる。つまり、開くのは、具体的に言えばつぼみである。その意味で、er (blühen) が非空間的であるとすれば、その抽象性が、「つぼみ」と言う際の具体的な事態把握と齟齬をきたすということが考えられる。

このような見解をとる文献も実際にある。第1に Dewell (2015: 150f.) は、両語の差は基本的には使用域に関わるとしながらも、Stiebels (1996: 74f.) の指摘する選択制限に触れ、不変化動詞である aufblühen が「個々の花やつぼみに対する、より高い注意を引き起こす」のに対し、接頭辞動詞である erblühen は、「[焦点の] 拡散したプロセス」を表す、と述べている。これを本稿の Dewell (2015) 理解に従って言い換えれば、aufblühen は事態を時間的な展開に沿って具体的に捉えるのに対し、erblühen は事態を要約的・抽象的に捉える、ということになる。第2に Benoist (2011: 148) は、「aufblühen は目で見えるプロセスを表すのに対し、erblühen ではプロセスが「知的」に把握されるようである」と述べているが、この指摘も、具体的対抽象的という説明に収斂すると考えられる。

Die Knospe erblüht (19b) という文の容認性が低いことには、しかしながら、少し違った角度からよりよい説明が与えられると本稿は考える。開花という出来事には、いわば「出現」という捉え方と「発展」という捉え方があり得る。つまり、つぼみさえも未出来であったところから花が出現する（被成変化）と捉える場合と、つぼみは既にあり、その発展として花が咲く（被動変化）と捉える場合とがあり得る。実例分析からは後述のように、erblühen が「出現としての開花」を、aufblühen が「発展としての開花」を表す傾向が確認される。そうだとすれば、erblühen は Die Knospe を主語として伴い難いと予想される。なぜなら、その場合つぼみは既存と解釈される以上、全体として aufblühen が典型的に表す「発展としての開花」という解釈に傾き、erblühen が典型的に表す「出現としての開花」と齟齬をきたすと考えられるからである。

erblühen が「出現としての開花」を表す傾向があるのに対し、aufblühen が「発展としての開花」を表す傾向があることは、いくつかの観察によって裏付けられる。第1に、主語項に当たる名詞句が定である割合は aufblühen における方が高く、反対にそれが不定である割合は erblühen における方が高い。今回の収集例では表2に示す分布になる。もちろん両者に完全な対応が見られるわけ

ではないが,¹⁴ 被成物は不定表示と、被動物は定表示と親和的であり、定性に関するこうした差異は、上記の傾向を示唆していると言える。

	定	不定	不明	計
erblühen	101 (61.6%)	62 (37.8%)	1 (0.6%)	164 (100%)
aufblühen	127 (81.9%)	25 (16.1%)	3 (1.9%)	155 (99.9%)

表2. 主語項に当たる名詞句の定性

第2に、aufblühen は、過程に注意を向ける副詞、例えば「徐々に」という意味の allmählich と問題なく共起するのに対し、erblühen はそれと共起し難いことも本稿の見解を裏付けている。¹⁵ なぜなら、「出現」においてよりも「発展」において、過程に注意が向けられやすいと考えられるからである。

まず、aufblühen に関して述べる。同コーパスで aufblühen と allmählich の共起例を検索し（検索日：2019年8月29日）収集した事例を分析した結果、当該事例は53件となった。両語は問題なく共起することが分かる。¹⁶ 収集例から、過程に注目していることの明らかな例を挙げる（20）。

- (20) Marko Mimica ist kein Mensch, der das Leben leicht nimmt. Er wirkt eher nachdenklich, tiefsinnig, ein bisschen verschlossen. Wenn man zwei Stunden lang mit ihm spricht, ist es schön zu beobachten, wie er **allmählich aufblüht**. Die Sätze werden immer länger, die Gesten

¹⁴ 主語項に当たる名詞句が不定であるにも関わらず被動変化が表されている例：Die Schwierigkeit der Probleme wie die Bedeutung, die ein Erfolg bei den Bemühungen um eine friedliche Wasserstoffverschmelzung haben würde, ließ einen Zweig der Physik **aufblühen**, der noch vor zwei Jahrzehnten wenig Beachtung gefunden hatte: die Plasmaphysik. (Die Zeit, 02.05.1969)

¹⁵ この主張は、Dewell (2015: 132) やとりわけ Erben (1972: 73) の次の指摘に着想を得ている。welche [an-, auf-, ein-, los-] nur eine lose Bindung mit dem Verben eingehen und weniger das punktuelle Einsetzen eines Vorgangs als die Phase des Anlaufens, Ingang-kommens oder -bringens bezeichnen [als er- und ent-]. (Erben 1972: 73) er- との対比はなされていないが、aufblühen の auf- が「徐々に進む発展 allmähliche Entwicklung」を表すという指摘は Goergen (1994: 44) もしている。また、er- 動詞について Stiebels (1996: 73) は、大抵の er- 動詞は allmählich や nach und nach と共起できないと述べている。

¹⁶ DWDS の Wortprofil における aufblühen の記載では（最終アクセス：2019年7月29日）、allmählich が当該語と13番目に高い頻度で共起する副詞規定として挙がっている。これは、非常に高い頻度とは言えないだろうが、少なくとも稀と言える頻度ではないように思われる。他方の erblühen に関しては（最終アクセス：2019年7月29日）、allmählich との共起は記載されていない。

größer, bis er am Ende sein Gegenüber immer wieder temperamentvoll anstupst. (Berliner Morgenpost, 28.04.2016) Marko Mimica は、陽気な人間ではない。彼はむしろ物思いに沈みがちで、思慮深く、少し打ち解けないところがある。2時間彼と話せば、彼が徐々に [allmählich] 花開く [< aufblühen] のがよく観察できる。文はどんどん長くなり、身ぶりは大きく、終いには相手を何度も情熱的に小突くまでになる。

他方の erblühen は先述の通り allmählich と共起し難い。しかし全く共起しないというわけではなく、同コーパスで erblühen と allmählich の共起例を検索したところ（検索日2019年7月28日）、当該事例は次の2件見つかった。

- (21) Caroline Vollmann spricht von „Kümmernissen“ anstatt von „Leid“, was besser ins Milieu passt. Zwar verfeinert sie den „Mist“ zum „Dung“ (der vermutlich weniger streng riecht), aber sie vermeidet den Bürokratismus des Verbs „entwickeln“, indem sie kurz und bündig schreibt, Emma Bovary, sei „nach und nach zum Erblühen gebracht worden“ – wobei allerdings die Stufen und die Steigerung verloren sind.

Maria Dessauer kennt auch die „Begierden“, spricht aber exakter von der „Erfahrung der Lust“, veredelt den „Mist“ noch weiter zum „Dünger“ und verzichtet auf Steigerung und Entwicklung, indem sie die Heldin, schon weit entfernt vom Original, „**allmählich**“ **erblühen** lässt. (Süddeutsche Zeitung, 20.10.2012)[第1段落略] Maria Dessauer は「欲望」という言葉も熟知してはいるが、「快樂の経験」という、より正確な言い方をし、「こやし」を「肥料」という高尚な言い方にし、主人公の女性を、原作から逸脱するかたちで、「徐々に」[allmählich] 花開かせる [< erblühen] ことによって、増大と発展を断念している。

- (22) Wenn die ersten wärmenden Sonnenstrahlen das Land **allmählich** wieder **erblühen** lassen, dann geht auch die Saison für die Hobbygärtner unter uns wieder los. (Niederösterreichische Nachrichten, 31.03.2017) あたたかな日差しが大地を徐々に [allmählich] また花開かせだす [< erblühen] 時、私たちの間にいるガーデニング愛好家たちのための季節もまた始まる。

しかし、この2例が反例になるとは限らないように思える。(21) では、第1段

落から推察するに、翻訳者が *entwickeln* という表現を使う代わりに、*allmählich erblühen* という訳を採用していること、しかしそのことで、「増大と発展」の意味が失われていることが指摘されている。すると、この *allmählich* は必ずしも *erblühen* の「過程への注目」という働きをしているわけではない、ということになる。*allmählich* には、「そろそろ」とも訳し得る、ある出来事自体の過程ではなく、それが生じるまでの過程を表す用法もあるが（国松他編1998: 87: 「Wollen wir *allmählich* gehen? そろそろ出かけようか」）、(21) の *allmählich* がこれに当たる可能性は高い。また (22) においても、同様の解釈が成り立つ可能性がある。

第3に、あるインフォーマントも、次に (23) として再掲する *erblühen* の既出の例 (16) に関して、本稿の見解を裏付ける趣旨の発言をしている。(23) において「新しい街々」は鉄道が通る前は無かったと解されるが、この *erblühen* を *aufblühen* に替えると (23'), 発展前にも街の原型のようなものがあつたと解されると言う。

(23) Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **erblühen** liess, hat seit der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts einen stetigen Niedergang erlebt, ohne dass es seine nostalgisch verklärte Beliebtheit eingebüsst hätte. (NZZ am Sonntag, 13.09.2009) かつてアメリカを動かし、新しい街々を沿線に栄え [< *erblühen*>] させた鉄道という交通手段は、20世紀前半以来常に衰勢であるが、懐古趣味的に美化されており人気を失っているわけではない。

(23') Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **aufblühen** liess, ...

以上のことから本稿は、*erblühen* には「出現としての開花」を表す傾向があるのに対し、*aufblühen* には「発展としての開花」を表す傾向がある、と考える。

3.2. 〈咲き止む〉とその類語義

表1 (2.7) にも示したように、個別の考察からは、〈咲き止む〉という語義において *abblühen* と *verblühen* の競合が見られるということになるが、「はじめに」でも紹介したように、先行研究では終了相という括りで *abblühen*, *ausblühen*, *verblühen* の3語の競合が語られることが多いので、本節の考察もそれに準じる。そうすることで、例えば〈咲き止む〉と〈咲き終わる〉の違いもより明確になる。

当該3語の差異に関しては、Eberhard (1982 [1910]: 3ff.) が大変興味深い論述をしているので (24), それを本節の考察の出発点としたい。

- (24) *verblühen* bezeichnet mehr das Welken, *abblühen* mehr das Abfallen der Blütenblätter; *ausblühen* bedeutet, daß die Zeit der Blüte für eine Pflanze völlig vorüber ist, oder daß die Blüte zu vollständiger Entfaltung gekommen ist. So hat ein Rosenstock, der für den Augenblick *abgeblüht* hat, doch noch nicht *ausgeblüht*, wenn er nach kurzer Zeit noch einige verspätete Blüten treibt, und eine Rose kann *abblühen*, ohne *ausgeblüht* zu haben (wenn sie z.B. durch ungünstige Witterung geschädigt wird). [...] [*Verblühen*] steht vielfach in übertragener Bedeutung, z.B. *verblühte* Wangen. In dieser übertragenen Bedeutung bezeichnet es gewöhnlich die rasche Vergänglichkeit alles Irdischen und ist sinnverwandt mit *verwehen*, *vergehen*, *verwelken*, *enteilen*, *entfliegen*, *dahinschwinden*, *entschwinden*; doch bezeichnet es nicht das Vergehen schlechthin wie die übrigen Ausdrücke, sondern hebt das Vergehen des Schönen, Jugendlichen und Kräftigen hervor. (Eberhard 1982 [1910] 5f.)
- verblühen* はしおれることを, *abblühen* は花びらの落花をむしろ表し, *ausblühen* は, ある植物の花期が完全に過ぎたこと, ないし, 花が完全に花開くに至ったことを表す。例えば, 一時花を咲き落とした／花を咲かせるのを止めた [< *abblühen*] バラの株であっても, すぐにまた遅咲きの花をつけるならば, まだ咲き終わって [< *ausblühen*] いないことになる。バラは咲き終わらずに [< *ausblühen*] 花を咲き落とし／花を咲かせるのを止め [< *abblühen*] うるということである (例えば悪天候の被害によって)。 *verblühen* は比喩的な意味で様々に用いられる。例えばこけた [< *verblühen*] 頬。こうした比喩的な意味において *verblühen* は通常, あらゆる地上のものの儚さを表し, *verwehen* 「吹き消す, 吹き消される」, *vergehen* 「消える」, *verwelken* 「しぼむ, しおれる」, *enteilen* 「(急いで) 立ち去る」, *entfliegen* 「逃げ去る」, *dahinschwinden* 「消え去る」, *entschwinden* 「消え失せる」と類義である。しかし *verblühen* は, 他の諸表現のように消滅そのものを表すのではなく, 美しいもの, 若々しいもの, 力強いものの消滅を強調する。

第1に *abblühen* が「花びらの落花」を表す (24) という見解に関しては,

部分的にはあるが賛同できる。例えば今回の有効データである30例には次のような文例があったが、この例においては、分離・落下の意味合いが窺われる。なぜなら、花が普通の仕方で咲き終われば「さや」が付くのであるから、ここでは落下が表されていると考えられるからである。

- (25) In Niedersachsen wuchs der Raps in vielen Gebieten so rasant in die Länge, dass die Pflanzen insgesamt zu wenig Nährstoffe abbekamen. Die Folge: der Raps verkümmerte und **blühte** ohne Schote **ab**. (Hamburger Morgenpost, 22.05.2018) ニーダーザクセンではナタネが多く場所で、全体として栄養がいきわたらなくなるほどの勢いで背を伸ばしている。その結果、ナタネは育ちが悪くなり、さやを付けずに花が落ちた [＜abblühen]。

それに対し、同収集例中の次のような例では、分離・落下の意味合いは希薄と考えられる (26)。なぜなら、仮に当該の意味合いが濃厚であれば、その後に「落ちている」[＜herabschlagen] という表現を加える必要はなかったからである。Rich (2003: 162) も述べているように、ab- の具体的な意味合いの実現はあくまでも文脈に依存する、と言える。

- (26) Blütenkopf, die unteren Blüten sind **abgeblüht** und herabgeschlagen. (Wikipedia, 2011) 花芽、つまり花の下の方は咲き止んで [＜abblühen] 落ちている。

したがって、abblühen の語義としては〈咲き止む〉というのがやはり適切で、それが「落花」であるかどうかは文脈次第と言える。

第2に ausblühen が「花期が完全に過ぎたこと」を表すという見解 (24) に関しても賛同することができる。ausblühen は〈咲き終わる／咲き終わるところである〉ことを表すのに対し abblühen は〈咲き止む／咲き止むところである〉ことを、verblühen は〈咲き止む〉ことを表す、と本稿は先述した。この区別に則れば、abblühen と verblühen は内在的な咲き終わりに至るかどうかには中立であるのに対し (27) (28) (29) (30), ausblühen はそれに至ることを含意するということになる (30')。その意味で、Hundsnurscher (1997: 190) のように、当該 aus- は、当該 ab- と比較して「終結的 [terminativ] なニュアンスを強く有する」と言うこともできるだろう。

- (27) Heftiger Wind und sehr sonniges Wetter ließen die Bäume zum großen Teil schon wieder **abblühen**. (Niederösterreichische Nachrichten, 12.04.2011) 激しい風と日照りで木々の大部分はもうまた花を咲かせることを止めた[< abblühen]。[=内在的な咲き終わりに未到達]
- (28) Die Eiben-Pollen werden die Allergiker als nächstes plagen, dann folgen Weiden, Pappeln und Birken. Sind diese Bäume **abgeblüht**, sind die Sorgen für viele Betroffene noch nicht vorbei. (Nordkurier, 15.04.2013) イチイの花粉が次にアレルギー患者を苦しめることになるが、それからヤナギ、ポプラ、シラカバと続く。これらの木々が花を咲かせることを止めても(< abblühen)、多くの患者はまだ安心できない。[=内在的な咲き終わりに到達していると考えられる]
- (29) Bis Mitte Juli blühen im Unterland die Rapsfelder in leuchtendem Gelb. Dann **verblühen** sie, und die Rapssamen können geerntet werden. (Tages-Anzeiger, 08.05.2008) 7月の中頃まで低地ではナタネ畑が明るい黄色の花を咲かせる。それから花が咲き止み、種が収穫できるようになる。[=内在的な咲き終わりに到達]¹⁷
- (30) Es sind Pflanzen mit meist starkem Knospen- und Blütenbesatz. Und sie müssen sich schlagartig vom kühlen, feuchten Klima des Glashauses auf einen trockenen Platz im Haus einstellen. Häufig werden sie sogar direkt ins geheizte Wohnzimmer gestellt. Eine enorme Stresssituation! Kommt dann auch noch eine direkte Besonnung hinzu, **verblühen** die Azaleen in kürzester Zeit (Nürnberger Nachrichten, 25.11.2000) それらは、たいていしっかりとしたつぼみと花株のある植物である。それらが、涼しく湿気のある温室の気候から急に、家の中の乾燥した場所に順応しなくてはならないのである。それどころか直に暖房のきいたリビングに置かれてしまうことも多い。非常にストレスがかかる状況だ！加えて直射日光にさらされようものなら、アザレアは極めて短期間に咲き止んでしまう(< verblühen)。[=非本来的な咲き終わり方：内在的な咲き終わりに未到達]
- (30') ¹⁸Kommt dann auch noch eine direkte Besonnung hinzu, **blühen** die

¹⁷ ver- は一般に、「予期からの逸脱」(Brinkmann 1971: 236f.) ないし「標準的な経過からの逸脱」(Ogawa/Rusterholz 2011) という意味に貢献すると指摘する文献もあるが、こうした指摘は当該 ver- には完全に当てはまるわけではないと言える。

Azaleen in kürzester Zeit **aus** [18] はあるインフォーマントの判断。(30)の *verblühen* を *ausblühen* で言い換えることは、*ausblühen* が稀な表現であることは差し引いても、やはり意味的に困難であるという。「アザレア」がこの状況において短期間で咲き止む [*verblühen*] ことはあっても、咲くことをまっとうする [*ausblühen*] ことはないからだと考えられる。]

第3に、*verblühen* は「しおれること」を表し、また「美しいもの、若々しいもの、力強いものの消滅を強調する」という指摘 (24) はどうか。まず前半の「しおれること」に関してだが、各種の辞書記述に鑑みても *verblühen* が「しおれる、しぼむ (*verwelken*)」ことを表し得ることは同意できる。しかし、当然のことながら *verblühen* は *verwelken* とは異なる。そのことは、*verblühen* と *verwelken* が共起する例によって示すことができる。両語の共起例をコーパスで検索すると (検索日：2019年12月25日；ヒット数：28件)、例えば次のような例が見つかる (31)。

- (31) Herschel untermauerte die Kantsche Vorstellung nun aber durch empirische Beobachtungen. Er verglich seine Weltbetrachtung mit einem Gang durch den Garten: Dort finden sich Pflanzen in verschiedenen Zuständen, mit Knospen, blühend, **verblüht**, **verwelkt** oder als fast totes Wurzelwerk. (Zeit Geschichte, 28.05.2019) Herschel はカント的な考えを、いまやしかし経験的な観察を通じて根拠づけていた。彼は自分の世界考察を、庭の散歩に例えた。そこには植物が様々な状態にある。つぼみを付けていたり、咲いていたり、咲き止んでいた (< *verblühen*)、しぼんでいた (< *verwelken*)、あるいはほぼ死んだ根っこ状態だったりする。

(31) において、*verblühen* は「しおれる・しぼむ」という意味を明らかに実現していない。仮に実現しているとしたら、*verwelkt* と全く同じ状態を表すことになり、様々な状態の例示という論旨と合わないからである。こうした例に鑑みると、*verblühen* の語義としては〈咲き止む〉というのが適切で、それが「し

18 同様のことは、比喩的な用法についても当てはまる：An einem Tisch drei Leute, ein Rocker, langes Haar, und ein Paar. Die beiden waren offensichtlich einmal hübsch, nun sind sie nicht nur **verblüht**, sie sind regelrecht **verwelkt**. Er trotz seiner Lederhaut noch leidlich rotblond, sie trägt die dünnen Haare schwarz gefärbt. (die tageszeitung, 27.07.2004)

おれる、しほむ」ことなのかどうかは文脈次第と言える。¹⁸

次に後半の「美しいもの、若々しいもの、力強いものの消滅を強調する」という点に関してだが、比較対象が本稿のそれと必ずしも一致しないので内容の当否を直接論じるのではなく、この指摘が連想を呼ぶ「ver- には否定的な評価の意味合いがある」という言説について論じる。例えば、Hundsnurscher (1997: 182) は、当該の終結 (terminativ) を表す ver- 動詞に関して次のように述べている (下線は引用者)。

- (32) 現代 [ドイツ] 語では、ver- 動詞と aus- 動詞の分化は通常次のようになっている。すなわち、ver- 動詞は、過程の否定的な negativ (退行的な deteriorativ) 側面を強調する一方、aus- 動詞は時間的に終わりに向かうことを中立的に表す。

しかし、否定的な評価というのは、次の2つの要因からくる副次的な効果であると考えられる。第1に、咲いていない状態への変化を含意する verblühen は、それを必ずしも含意しない、言い換えれば、(終局にあるとはいえ) なお咲いている状態を表し得る ausblühen (および abblühen) と異なる。咲いていない状態への変化は、通常否定的に捉えられるが故に、verblühen の方が、過程の否定的側面を強調し得る。第2に、ausblühen は咲くことをまっとうすることを表すが、verblühen (および abblühen) はそうとは限らず、非本来的な終わりを表すこともある。まっとうしないことは、通常否定的に捉えられる以上、verblühen の方が、同様に過程の否定的側面を強調し得る。

以上で、abblühen と ausblühen、ausblühen と verblühen の差異は明らかになった。残るは verblühen と abblühen の差異ということになるが、これに関してはすでにいくつか述べたので、それらを最後にまとめておく。両語は第1に、abblühen のみが〈咲き止む〉という sein 支配の語義の他に、〈咲き止むところである〉という haben 支配の語義を有する、という点で異なる。また〈咲き止む〉という語義に限定しても、abblühen は文脈によって「落花」の意味を実現するのに対し、verblühen は文脈によって「しほむ・しおれる」の意味を実現するという差異がある。¹⁹

¹⁹ 両語の間には aufblühen と erblühen に見られたのと並行するような差異が見られるのではないかも知想されるが、主語項の定性に鑑みても allmählich との共起に鑑みても、そのような差異の存在が示唆されることはなかった。

4. 前綴りの考察

本章では、前章で明らかになった差異を手がかりに、当該前綴を競合と対立という観点から考察する。

4.1. 競合関係

4.1.1. auf-, er-

当該の auf- と er- は共に、基盤動詞の動作相を継続相から開始相に変えている。それから傾向として、当該 auf- は「発展」の意味合いに、当該 er- は「出現」の意味合いに貢献していると言える。これは、当該 auf- には「開く」という具体的な意味が認められるのに対し、er- にはそれが認められないことに一部起因すると考えられる。何か「開く」際には、その何かは通常すでに存在していなくてはならないからである。

開始相化という機能における auf- と er- の競合は、aufblühen と erblühen 以外のケースでも広く見られることが知られている。aufblühen や erblühen と同様に過程の開始を表す自動詞に限定して言えば、次のような例が挙げられる (33)。²⁰

(33) a. 「光る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

aufglänzen – erglänzen / aufglimmen – erglimmen / aufglühen –
erglühen / aufscheinen – erscheinen / aufschimmern – erschimmern
/ aufstrahlen – erstrahlen

b. 「鳴る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

aufdröhnen – erdröhnen / aufhallen – erhalten / aufklingen
– erklingen

c. その他の基盤動詞からの派生動詞

aufbeben – erbeben / aufblühen – erblühen

国松他編 (1998) の記述に従えば、多くの競合例において、auf- 動詞が「急に、突然」という意味をむしろ担っていることになる。例えば (33a) の aufglänzen 「(急に) 輝き始める; (一瞬) ぱっと輝く」と erglänzen 「輝く、輝き出す、きらめく、ひらめく」、(33b) の aufklingen 「(突然) 響き始める、鳴り出す」と erklingen 「鳴り〈響き〉始める」、(33c) の aufbeben 「(突然短く) 振動する」

²⁰ (33) は Kühnhold/Wellmann (1973: 291f.) のカテゴリー設定および分類を出発点に、主に国松他編 (1998) に依拠して作成した。なお、Kühnhold/Wellmann (1973: 291f.) では、ここで挙げるよりも多くの例が挙げられているが、今日著しく一般的でない語に関しては紹介を省いた。

と erbeben「震える」といったように。²¹

先行研究には, aufblühen の auf- に対して, 後述の er- に対してと同様に, plötzlich を用いた言い換え (aufblühen = plötzlich blühen = erblühen) が可能とする文献もあるが (Kühnhold 1969: 331), 先述のように aufblühen が allmählich と問題なく共起する以上 (20), この見解には与することはできない。auf- は, 瞬間的な開始のマーカ―として機能する場合もあれば, そうでない場合もあると言える。Lechler/Roßdeutscher (2009: 463) も, auf- は「(緩やかな, ないし急な) 開始も, 出来事ないし状態の短い継続も共に示しうる」と述べている。上述の auf- に関しても, 実際にどの程度瞬間的な意味合いがあるのかは今後検証する余地があると思われる。

4.1.2. ab-, aus-, ver-

当該前綴は, 非有界な基盤動詞を有界に変える働きでは共通している (Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997: 1865f.)。ver- の付与は常に変化動詞形成を引き起こすが, ab- と aus- の付与は終局表示を可能にするだけの場合もある。他にも, ab- は「分離・落下」という意味合いの実現を, ver- は「しほむ・しおれる」という意味合いの実現を可能にし, aus- は, 内在的な終点到達を表すことに貢献する。

終了相化において同様の3つの前綴りが競合する例には, 他にどのようなものがあるだろうか。網羅的なピックアップはまだできていないが, (33) の分類を手がかりに探すと, 例えば次が見つかる (34)。本稿の考察がこうした競合状況にどの程度当てはまるかを明らかにすることは, 今後の課題である。

(34) a. 「光る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

abglimmen – verglimmen – ausglimmen (古風) /

abglühen – verglühen – ausglühen

a. 「燃える」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

abbrennen – verbrennen – ausbrennen

b. 「鳴る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

abklingen – verklingen – ausklingen

²¹ Duden (2014) ではこの点に関して, 特に erbeben において見解の相違が目立つ (下線部引用者)。aufglänzen (掲載なし), erglänzen (glänzend aufleuchten); aufklingen (plötzlich für kurze Zeit erklingen, zu klingen beginnen), erklingen ([als melodischer Klang] hörbar werden); aufbeben (掲載なし), erbeben (plötzlich u. heftig zu beben anfangen [...])

c. その他の基盤動詞からの派生動詞

abblühen – verblühen – ausblühen

4.2. 対立関係

開始相の前綴と終了相のそれとを多対多で比べると, Stiebels (1996: 77) の言うような開始相表示と終了相表示の非対称が, blühen 群でも見られる点がまづ指摘できる。開始相は, auf- と er- にしか分かれていないのに, 終了相の方は, ab-, aus-, ver- の3つに分かれている。²² また, それと合わせて, 開始相と終了相の意味的な分化の仕方も非対称的である。開始相では傾向として, 「発展」(auf-) か「出現」(er-) かという点で分化が認められたのに対し, 終了相では, 一方では, 変化を常に含意する ver- と, それを必ずしも含意しない ab- と aus- とに分かれ, 他方では, 中断としての終了を表しうる ab-, ver- と, まっとうとしての終了しか表さない aus- とに分かれる。

発展か出現かという分化が終了相に見られないのは, 終了相において対象は常に既存であることが関与していると考えられる。他方で, 変化の有無という基準による分化が開始相に見られないのは, 「有になるところの無」といったものを(それが無である以上)把握できないことに, 内在的な終点を基準にした分化が開始相に見られないのも同様に, 「有になるのを中断した無」といったものを把握できないことに根拠を持つと考えられる。

次に両相の前綴を一對一で比較する。例えば Dewell (2015: 236f.) や Agricola/Agricola (1982: 97, 242) は, er (blühen) と ver (blühen) が対称的である, 対義語であると見なしている。しかし, er- においては過程への注目が起こり難いが (3.1), 他方の ver- においてはそうではない。verblühen と allmählich の共起する例をコーパスで検索すると (検索日: 2019年12月20日; ヒット件数: 10件; 有効データ: 6件), (35) のように比喩的用法とはいえ過程への注目の明らかな例が見つかる。²³

²² 開始相の表現としては, 先述のように anblühen や entblühen もないわけではないが, 今日では aufblühen と erblühen に駆逐されていると言える。

²³ anfangen と共起することなどから, verblühen を Accomplishment 動詞 (過程を含意する変化動詞) と見なしていると解される文献もある (Nicolay 2007: 44ff.)。verblühen が過程を含意するという点は賛同できるが, その根拠をなすテストの有効性については疑問の余地がある。というのも, 実際には Achievement 動詞であっても anfangen や beginnen と共起することは可能と言えるからである。典型的な Achievement 動詞とされる finden 「見つける」の実例: Plötzlich hörte ich auf zu suchen und begann zu finden: mich selbst. (<https://peterjanki.com/peterjanki/>, 最終アクセス: 2020年1月24日)

- (35) Marion war einmal eine Schönheit gewesen. Doch im Laufe der Jahre war sie allmählich **verblüht**, und der Rotwein hatte ihrem Gesicht seine Farbe anvertraut. (die tageszeitung, 24.12.2010) Marion は、昔は美人だった。しかし年月の流れの中で徐々に咲き止み [< allmählich verblühen], ワインの色が顔について [ワインの飲み過ぎで顔色が悪くなって] しまっていた。

よって er- と ver- は厳密には対称的とは言えない。当該 ver- と対称的なのはむしろ auf- であると考えられる。blühen 群の使用頻度の分布からも、この考えは支持される。

なお abblühen に関しても同様に、allmählich と共起する例を調べてみたが (検索日: 2019年12月20日; ヒット件数: 2 件), 有効データは 0 件となった。これはしかし、abblühen が頻度の低い表現であることに起因する可能性がある。したがって、ab- が auf-, er- のどちらと対称か現時点では判断できない。²⁴ 残る aus (blühen) に関しても同様である。²⁵

5. 展望

次に取り組むべき諸課題のうち、blüh- 群と同じ前綴分布を示す同語幹動詞群の分析にとりわけ関心を引かれる。具体的には、glimmen 群, glühen 群, klingen 群のことである。²⁶ それらの同語幹動詞群において、意味の分化状況はどのようになっている、それはどの程度 blühen 群と共通するのだろうか。それを明らかにすることで、ドイツ語の造語論の根本問題の 1 つである「接頭辞と不変化詞の競合」の解明に、さらに寄与できると考える。

²⁴ abblühen は、例えば beginnen と共起し得るが (Der Raps beginnt abzublühen. (Nordkurier, 01.06.2010)), 上の註で述べたようにこのテストの有効性には疑問の余地があり、abblühen を Accomplishment 動詞と見なす根拠とは言えない。

²⁵ ausblühen が allmählich と共起する例をコーパスで検索しても (検索日: 2019年12月20日; ヒット件数: 5 件), 有効データは 0 件となる。

²⁶ klingen 群において、anklingen が開始相表現であるかのように言われることもあるが、この点は疑問の余地が大きい。ここで詳述することはできないが、klingen 群も blühen 群等と同列に扱えると考えている。

文献表

- 国松孝二 他編 (1998):『独和大辞典』, 第2版, 小学館.
- 相良守峯 (1978):『大独和辞典』, 第25版, 博友社.
- 佐藤通次 (1982):『独和言林』, 白水社.
- Admoni, Wladimir (1982) : *Der deutsche Sprachbau*, 4., überarbeitete und erweiterte Aufl., München: Verlag C.H. Beck.
- Agricola, Christiane / Agricola, Erhard (1982) : *Wörter und Gegenwörter: Antonyme der deutschen Sprache*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Benoist, Stéphanie (2011) : Verbale Derivationsmechanismen am Beispiel von *auf-* und *er-*, in: Kauffer, Maurice / Métrich, René (Hgg.) : *Verbale Wortbildung im Spannungsfeld zwischen Wortsemantik, Syntax und Rechtschreibung*, 2. Aufl., Tübingen: Stauffenburg Verlag, 145-156.
- Brinkmann, Hennig (1971) : *Die deutsche Sprache: Gestalt und Leistung*, 2., neubearbeitete und erweiterte Aufl., Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Bußmann, Hadumod (2008) : *Lexikon der Sprachwissenschaft*, 4., durchgesehene und bibliographisch ergänzte Aufl., unter Mitarbeit von Hartmut Lauffer, Stuttgart: Alfred Kröner Verlag.
- Dewell, Robert B. (2015) : *The Semantics of German Verb Prefixes*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Duden 4 (2009) : *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8., überarbeitete Aufl., Berlin: Dudenverlag.
- (2014) : *Die deutsche Sprache: Wörterbuch in drei Bänden*, Bd. 1-3, Berlin/Mannheim/Zürich: Dudenverlag
- DWB = *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984.
- Eberhard, Johann August (1982 [1910]) : *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 17. Aufl., durchgängig umgearbeitet, vermehrt und verbessert von Otto Lyon, Tokyo: Sansyusya [Leipzig: Th. Grieben's Verlag] .
- Erben, Johannes (1972) : *Deutsche Grammatik: Ein Abriss*, 11., völlig neubearbeitete Aufl., München: Max Hueber Verlag.
- (2006) : *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre*, 5., durch-

- gesehene und ergänzte Aufl., Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Fleischer, Wolfgang / Barz, Irmhild (2012) : *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, 4. Aufl., völlig neu bearbeitet von Irmhild Barz unter Mitarbeit von Marianne Schröder, Berlin: De Gruyter.
- Goergen, Pascal (1994) : *Das lexikalische Feld der deutschen inchoativen Verben*, München: iudicium verlag.
- Hundsnurscher, Franz (1997) : *Das System der Partikelverben mit aus in der Gegenwartssprache*, Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Kühnhold, Ingeburg (1969) : Über das Verhältnis von *auf-* und *er-*, in: Erben, Johannes / Thurnher Eugen (Hgg.) : *Germanistische Studien*, Innsbruck, 327-335.
- Kühnhold, Ingeburg / Wellmann, Hans (1973) : *Deutsche Wortbildung, Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache, Erster Hauptteil: Das Verb*, Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Lechler, Andrea / Roßdeutscher, Antja (2009) : German Particle Verbs with *auf*: Reconstructing their Composition in a DRT-based Framework, in: Grewendorf, Günther / von Stechow, Arnim (2009) : *Linguistische Berichte*, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 439-478.
- Lewandowski, Theodor (1984) : *Linguistisches Wörterbuch 1*, 4., neu bearbeitete Aufl., Heidelberg: Quelle & Meyer.
- Mater, Erich (1967) : *Deutsche Verben 2: Grundwörter und deren Zusammensetzungen*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Nicolay, Nathalie (2007) : *Aktionsarten im Deutschen: Prozessualität und Stativität*, Tübingen: Niemeyer.
- Ogawa Akio / Rusterholz, Andreas (2011) : Das Präfix *ver-*: eine Herausforderung für Deutschlernende?, in Barkowski, Hans et al. (Hgg.) (2012) : *Zielsprache Deutsch 38*, 2, Tübingen: Stauffenburg, 27-36.
- Rich, Georg A. (2003) : *Partikelverben in der deutschen Gegenwartssprache mit durch-, über-, um-, unter-, ab-, an-*, Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Sanders, Daniel (1968 [1876]) : *Wörterbuch der deutschen Sprache*, 2., unveränderter Abdruck, Tokyo: Sansyusya [Leipzig: Verlag von Otto Wigand] .
- (1924) : *Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 8., neubearbeitete und vermehrte Aufl. von I. Ernst Wülfing, Leipzig: Bibliographische Institut.

- Stiebels, Barbara (1996) : *Lexikalische Argumente und Adjunkte: Zum Semantischen Beitrag von verbalen Präfixen und Partikeln*, Berlin: Akademie Verlag.
- Storch, Günther (1978) : *Semantische Untersuchungen zu den inchoativen Verben im Deutschen*, Braunschweig: Vieweg.
- Wahrig (2011) : *Deutsches Wörterbuch*, 9. vollständig neu bearbeitete und aktualisierte Aufl., Gütersloh/München: Wissenmedia.
- Zifonun, Gisela / Hoffmann, Ludger / Strecker, Bruno (1997) : *Grammatik der deutschen Sprache*, Bd. 3, Berlin / New York: Walter de Gruyter.